

アングロ・サクソン年代記研究(1)

——序 説——

大 沢 一 雄

I

わが国における英語研究は、すでに百数十年の歴史を経過してきた。今日、英語を学習する人々は、老大な数に上り、英語を専門的に研究する研究者の数も、それに対応して多く、英語研究のピラミッドの底辺は、きわめて広大であるといわなければならない。

しかし、英語研究といっても、それは大部分、近代英語ないし現代英語の研究であり、中世英語の研究は、研究者の数も少なく、古代英語に至っては、さらに少なく、その研究は、少数の大学の大学院に限られているといっても過言ではないであろう。これは、いうまでもなく、現代英語の修得ないし研究が最も必要とされているからであり、したがって、現代英語の研究に最も多く力が注がれることは、むしろ当然のことといえるのであるが、しかし、それにもかかわらず、このように、中世英語や古代英語、とくに古代英語の研究実績がきわめて乏しいということは、現代英語研究の底辺が大きいだけに、むしろ異常な現象とさえいえるのではなからうか。なぜなら、一つの言語の研究にとって、その中世や古代の形式を研究することは、欠くことのできないことであり、そのことは、英語の研究についても、当然にいえることだからである。

ところが、イギリスにおいてさえも、中世英語はともかく、古代英語すなわちアングロ・サクソン語の研究は、比較的軽視されてきたのであり⁽¹⁾、それにかなりの比重がおかれるようになったのは、比較的新しいことであるといつてよい⁽²⁾。そして、このことは、イギリスの歴史において、アングロ・サクソン時代が無視されるか、少なくとも軽視されてきたことに対応するものであった。1066年の「ノルマン人の征服に続く三世紀間に対しては、一般に、六世紀間以上にわたるアングロ・サクソン時代よりも、何倍ものスペースが割り当てられている」⁽³⁾ということは、イギリスの歴史研究において、アングロ・サクソン時代がいかに軽視されてきたか、ということを示しているのである。

そして、このようにアングロ・サクソン時代が軽視されてきたことの理由の一つが、その言語にあることも否定することができないように思われるのである。

すなわち、ノルマン人の征服は、イギリスに政治的、社会的、文化的に大きな影響をあたえたが、とくに、その言語に対する影響は著しかった。フランス語をその言語とするノルマン人のイギリス征服は、アングロ・サクソン語、すなわち古代英語と中世英語との間に、中世英語と近代英語の差異よりもはるかに大きな、ロマンス語とその母語ラテン語との差異よりも大きな差異といわれるほどの大きな断層をつくってしまったのである⁽⁴⁾。したがって、古代英語は、通常の教育を受けたに過ぎない一般のイギリス人にはほとんど理解することのできない言語であることはもちろん、専門的に研究する場合にも大きな努力を必要とするのである。しかも、アングロ・サクソン時代の記録は、大部分、この古代英語で書かれており、古代英語は、その研究のためのほとんど唯一の言語であるとさえいえるのである。このように、アングロ・サクソン時代の研究に必要な言語の研究が軽視されてきたことが、その代時の歴史の研究の障害となり、逆に、この時代の歴史が軽視されてきたことが、その時代の言語の研究をおくらせてきたのであり、その両者が相互に原因結果の関係をなしていることが見落されてはならないのである。

アングロ・サクソン時代、したがって、アングロ・サクソン語軽視の理由は、これにとどまらなかった。ギリシャ・ラテン等の古典研究の重視という、ノルマン征服以来の一つの保守的な伝統は、今日もなお、イギリスの歴史や歴史研究を支配しており、多くの人々はロンドンの古い歴史よりも、アテネやローマの古い歴史にはるかに大きな興味を示しているとさえいわれるのである⁽⁵⁾。そして、アテネやローマの歴史の研究には、当然にギリシャ語やラテン語が用いられ、これらの言語は、歴史研究にとって最も必要な、むしろ、必要な唯一の言語とさえされてきたのである⁽⁶⁾。このような伝統は、古代英語研究の発展を阻んできたが、近年、古代英語の研究がかなり進み、アングロ・サクソン時代に近づく道が開かれてきたにもかかわらず、なお、それが根強く人々の心を支配しているといわれる⁽⁷⁾ことは、注目されなければならないであろう。

しかしながら、アングロ・サクソン時代は、想像されるほど、後の時代と断絶してはいなかった。たとえば、ノルマン人の征服は、統治機構を根本的に破壊するということはなかった。それは、アングロ・サクソン王朝の上流階級の人々をとり除いただけで、一般民衆の生活に致命的な影響をあたえるということではなかったのである⁽⁸⁾。また、政治上、行政上、宗教上の区画は、アングロ

・サクソン時代の遺産であり、今日においても、その時代と大きく異なるところがない。農業制度も、ノルマン征服後の数世紀間維持され、今日の土地測量制度の基礎となっているし、貨幣制度や度量衡制度も、この時代にさかのぼることができる。また、道路の多くは、補修を受けながらも、この時代から使用されてきたものなのである⁽⁹⁾。

文学、芸術においては、世俗的なものは、とくに多く失われているが、それにもかかわらず、アングロ・サクソンの伝統は、後述のように、今なお、あつづけることができるのである。

アングロ・サクソン時代の言語は、前述のように、フランス語を言語とするノルマン人の征服により、フランス語から大きな影響を受けた。それは、他の多くの言語からも影響を受けたが、フランス語およびその母語ラテン語からの影響はとくに著しかった。そして、これによって、外来語を含まないゲルマン語本来の性格の重要な部分⁽¹⁰⁾を失ない、多くの異質的な成分からなる言語へと変質していったのである。現在、英語の vocabulary のおよそ 55 パーセントがフランス語を主とするラテン系統の語であるといわれるのは、このような影響がきわめて著しいことを示している。しかし、それは、主として vocabulary の面においてであった。いや、vocabulary の面においてさえも、日常多く用いられる語の使用頻度を織りこんだ相対数では、ゲルマン語系統の語は今なお、およそ 85 パーセントを占めているのである⁽¹¹⁾。しかも、語の強勢が語幹の音節すなわち語頭または語頭近くにおかれ、語形から見た場合の二時制の体系をもつというような、ゲルマン語の基本的性格は、なお維持されているのである⁽¹²⁾。

これらのことは、アングロ・サクソン時代とその後の時代との間の断絶が必ずしも大きくないことを示している。そして、そこには、後の時代に対するアングロ・サクソン時代の影響の重要性が示されてさえいるのである。「それは、わが国の(=イギリス——筆者注)文化の——文学を除くそのあらゆる活動において、時々の新しい影響をどのように受けようとも、破られたことのない伝統によって今日まで維持されてきた文化の、形成期であった」⁽¹³⁾のである。

アングロ・サクソン時代がこのような時代であったとすれば、それは、後代の文化の研究にとって無視することのできない重要な時代であり、たとえ、文学のように、多くのものが失われているにしても、文学がその国民の文化と切り離して考えられない以上、文学にとっても、その研究はなお、無視してはならない重要性をもつものといわなければならないであろう。

前述のように、わが国における英語、英文学の研究においては、アングロ・サクソン時代の研究は、イギリスの場合と同様に、むしろそれよりもはるかに無視されてきた。そして、それは、英語を自国語としない日本人にとってはやむを得ないことであったかもしれない。しかし、アングロ・サクソン時代が上述のような意味で重要であるとすれば、その研究は、わが国における英語、英文学の研究にとっても、同様に重要な意味をもつものといわなければならないのである。とくに、現代英語研究の裾野がきわめて広大であるのに比較して、古代英語研究の峰がきわめて小さく低いという現状を思うとき、その重要性は声を大にして叫ばれてよいのではないかと思われる。

ところで、アングロ・サクソン時代の研究といっても、アングロ・サクソン文化のすべてにわたることは、いうまでもなく、一人の研究者にとっては不可能であり、それは各方面の総合的な研究によってはじめてなし得ることである。ところが、この時代に書かれた数世紀間の記録であるアングロ・サクソン年代記 the Anglo-Saxon Chronicle は、今日まで、その大部分が伝えられ、この時代の言語や政治・社会・宗教等の諸制度を忠実に伝えている。そこで、わたくしは主として、このアングロ・サクソン年代記によって、アングロ・サクソン語の性格や構造、その変遷等を明らかにするとともに、アングロ・サクソン時代におけるイギリスの政治的・経済的・社会的諸条件の特徴や構造に対して一つと照明をあててみたいと思うのである。もとより、この時代の研究が、今日のイギリスにおいて、かなりの程度におこなわれていることは、いうまでもない。しかし、われわれが、イギリスの外から、この時代の言語や制度を眺めた場合に、イギリス人が、自国語として、または自国の歴史や制度として眺めるのとまたちがった見方ができるのではないかと思われるのである。このような意図をもって、わたくしはこの小論を試みた。それは、いささか蠅螂の斧の感を免れないのであるが、それにもかかわらず、このささやかな研究が、イギリスでおこなわれているすぐれた研究の間隙を、幾分なりともうずめることができれば、その目的はほぼ達成されたことになるであろう。

II

「ノルマン人の征服以前の英語で書かれた最も重要な著作」⁽¹⁴⁾といわれるアングロ・サクソン年代記 the Anglo-Saxon Chronicle は、よく知られているように、アルフレッド大王(849—899)の時代に、ウインチェスターでその編纂が始められた。すなわち、アルフレッド王は、その当時残存していた古い記録や

文書を集め、民間の伝承を整理し、自己のデーン人との戦争の詳細な記録をつけ加えて、この年代記を編纂したのであるが、その後各地の僧院で、それぞれの地方的実情に応じて書き加えられて、それは、ノルマン人の征服頃まで続く龐大な年代記となったのである。

アングロ・サクソン年代記は、このように、アングロ・サクソン時代の数世紀間にわたる政治、軍事、外交その他もろもろの事象に関する英語で書かれた最も古い記録であるが、いうまでもなく、その歴史的事実としての信憑性について、すなわち、その記録の内容を史実として認めることができるかどうかということについては、綿密に検討されなければならないであろう。いったい、年代記をそのまま歴史の叙述と認めることができるのであろうか。年代記と歴史が同じものでないとしたら、その区別は、どのような基準にもとづいていなければならないのであろうか⁽¹⁵⁾。

歴史は人類の経験した事実やおこなった活動のすべてをいう場合と、それらの事実や活動について構成する認識体系、すなわち、或る基準によって取捨選択されたそれらの事実や活動の記録という二つの場合に分けて考えられるが、一般的には、後者の意味で用いられることが多い。年代記と比較される歴史の意味は、いうまでもなく、後者の意味である。この意味の歴史は、先に一言したように、人類の活動やその経験した事実、したがって、人類社会の過去における変遷、興亡などを一定の基準のもとに記録した、いわば一つの有機的な体系であるから、その全体としての完全さをきずつけることなく、恣意に事実を書き加えたり、とり除いたりすることは許されない。もちろん、歴史のとらえ方や認識のし方は、人によって時代によって異なる。したがって、歴史上の事実の取捨選択は絶えず変化し、歴史の記録は常に書きかえられてゆく可能性を蔵するものであるが、しかし、その場合にも、主観的に恣意的に書きかえられたり、客観的な事実から離れたりすることはできないのである。したがって、歴史の一つの認識体系についていえば、その歴史的事実は、あくまでも修正されることのない、変更することのできない事実であることが要求され、どこまでも客観性を追及し、正確な事実にもとづいて諸事象間の関係とその発展法則を明らかにしようとする。

これに対して、年代記は、事件の単なる年代順の叙述であり、そこに述べられた事件や事実が十分に検討され、確認されて、はじめて歴史となるのであり、したがって、それは、はじめから変更を加えられていく蓋然性を蔵したものであることができるであろう。そして、年代記作者は、歴史家と異り、事件を解

積したり、一般的原則の下に包摂したり、他の同種の事件と比較して同じ現象であるとしたりしない。しかも、重要な事件も重要でない事件も——とくに同時代のものは——同じように重大に扱う傾向がある。また、引用した資料や出典を明らかにしたり、出所の正しさを検討したりすることもなく、民間の伝説や伝承をそのまま用いることが多い。文章も、歴史家が、多くの語句を用い、詳細な叙述を展開するのに対し、年代記作者は、意識的に文章のないし文学的技術を用いることなく、簡単に短い文章で記録するが多い。したがって、それは、過去の事件を整理して蓄積する貯蔵所ではなく、記憶の年代順を示す図表のようなものに過ぎないのであり、未開人が、記憶保持のために、木の棒に刻み目をつけたり、いく本もの糸の多くの個所に結び目をつけたりしたことにも類する場合さえもあるのである⁽¹⁶⁾。しかし、それにもかかわらず、年代記は、他の何らかの資料によって、真実であることが立証される限り、その事実や事件は、歴史的事実ないし事件となるのであり、このような場合には、実質的に、歴史上の叙述と大きく異なるところがない、といわなければならないのである。この意味で、「年代記は最も単純な形式の歴史である」⁽¹⁷⁾ということもできるであろう。また、個々の事件について、そのような立証がなされない場合にも、そこに述べられている事実や事件を総合して、その時代の特徴や性格をつかむことは可能であり、この意味からも、年代記の歴史の資料としての価値を否定することはできないのである。

アングロ・サクソン年代記も、このような年代記の性格を十分にそなえているとあってよい。それは、初期においては、前述のような記憶保持のための刻み目や結び目の役目を果していた。たとえば、戦場や勝者の一二の名前が、その時代の人々には事件の発展の物語ないし伝説そのものとなって記憶に浮かび上ってきたのであり、記憶が薄らいだ時には、想像がそれを補ったのである。このような時代には、いうまでもなく、真実の追及や正確さの要求からは遠かった。しかし、時代がたつにつれて、事件や事実について正確に記録しようという傾向があらわれてくることは自然のなりゆきであった。アングロ・サクソン年代記には、そのように歴史的叙述に次第に接近していく過程が顕著に見られるのである⁽¹⁸⁾。したがって、その歴史の叙述ないし資料としての価値を否定することはできないのであるが、そればかりでなく、そこに記録されている個々の事実や事件が真実であるか否かという問題にかかわりなく、年代記から歴史的叙述への過程を明らかに示しているという意味でも、それは、大きな価値をもつものといえることができるであろう。また、文書の記録が一般にラテン語

でなされていた時代において英語が用いられたこと、しかも、中世のヨーロッパ西北部において、歴史上の記録に用いられた言語としては、——12世紀にノルウェー語による記録があらわれるまで——アイルランド語を別にすれば、英語が唯一の土着の言語であった⁽¹⁹⁾ということと思ひ合わせるとき、アングロ・サクソン年代記の存在そのものの歴史的意義はきわめて大であるといわなければならないのである。

III

アングロ・サクソン年代記編纂のための資料となったものは、当時一般に伝えられていた歴史はもとより、Bedeの英国教会史、古いウェスト・サクソン族の年代記、フランク族の年代記、その他の北方民族の年代記等とされているから、アングロ・サクソン年代記について深く研究するためには、これらの資料との関係を明らかにすることも、必要なことであるが、前述のような目的をもつ本稿においては、その余裕がない。また、必ずしも必要なことでもないであろう。むしろ、ここでは、本稿のおもな資料とするアングロ・サクソン年代記の稿本について、簡単に説明するにとどめよう。

アングロ・サクソン年代記は、七つの稿本と二三の断片的な資料によって現存する。七つの稿本は、一般に、ABCD……というように、アルファベットの文字をつけてあらわされるが、実質的には四つのグループに分けることができる。というよりはむしろ、これらの稿本が四つのアングロ・サクソン年代記を含むといった方がよい。⁽²⁰⁾ すなわち、Aは \bar{A} の写本であり、BとCは同じ稿本から写されたものと考えられるし、FはEの要約であるから、ACDEだけが、それぞれ別個の年代記と考えられるのである⁽²¹⁾。これらの稿本は、いわば同じ根から成長し、共通の材料を用いているという場合もあるが、それにもかかわらず、それらは、後述するところから明らかなように、別個の年代記なのである。以下、その稿本と断片的な資料をあげてみることにしよう⁽²²⁾。

1. Manuscript \bar{A} (The Parker Chronicle) Corpus Christi College, Cambridge, MS. 173, folio 1-32 [60 B.C.—A.D. 1070]—これは、単に \bar{A} またはthe Parker MS. と呼ばれるが、 \bar{A} は写本のAと区別するためであり、the Parker MS. といわれるのは、パーカー(Parker)大主教がケンブリッジ大学のCorpus Christi Collegeに遺贈したことによる。したがって、それはCCC Cant. 173として引用されることもある。CCCは、Corpus Christi Collegeの略、Cantは、Canterburyの略、173は、NasmithのCatalogueで173と数えられてい

るためである。

このA稿本は、891年までは一人の人の手によって書かれ、その後は、13名ないし14名の人々によって書き加えられた。975年後は、この稿本には、ほとんど何も書き加えられなかった。11世紀にそれはCanterburyのChrist Churchに移された。前記のCant.はこのCanterburyからとられたものである。ここでは、いろいろな挿入と変更が加えられた。

この稿本は、また、ウインチェスターでおこって現在すでに失われている年代記にもとづくと考えられているため、ウインチェスター年代記 the Winchester Chronicle と呼ばれることがある。

2. Manuscript A—これは大英博物館にある稿本のCotton Collectionの一部をなすということからCotton Otho B xiといわれる稿本で、11世紀にCanterburyで書き加えられる以前のAのCopyであるが、1731年に火事でほとんど焼失した。AはMS. Gとして引用されることもあるが、GとするとF稿本よりも後の時代のものであるという印象をあたえるので、Gとすることは必ずしも適当でない。それはFよりも100年ないし150年前のものなのである。また、MS. Wと呼ばれることもあるが、これはWheloc's editionのWからとったものである。Whelocの版からとったものばかりを引用する場合にはWでもさしつかえないといえよう。

3. Manuscript B (The Abindon Chronicle) : British Museum, Cotton MS. Tiberius A vi, folios 1-34 [A.D.1—A.D. 977]—大英博物館のCotton Collectionの一部である。したがって、Cotton Tiberius viとして引用される。記述は977年で終る。The Mercian Chronicle (Register)をそのままとり入れている。Bは891年までのAlfred大王の年代記の原本を写したもの(C)をさらに写したCopyで、1000年頃書かれ、Canterburyに送られたものと推定されている。しかし、新たな記入はなされていない。なお、Wessexの北東部のAbindonで作られたと考えられていることから、the Abindon Chronicleともいわれる。

4. Manuscript C (The Abindon Chronicle) : British Museum, Cotton MS. Tiberius B i, folios 115—64 [60 B.C.—A.D. 1066]—Bと同様に、Cotton Collectionで、the Mercian Chronicleをそのままとり入れている。The Abindon ChronicleといわれることもBについて述べたとおり。後Canterburyに送られ、そこで1066まで続けられた。CはOrosiusの世界史の古代英語訳を含むという点で、またB以後の記入がなされているという点で、重要な資料であ

る。この C だけに見られる記録は、それが叙述する時代については、最も価値ある資料となっている。

5. Manuscript D (The Worcester Chronicle) British Museum, Cotton MS. Tiberius B iv [A.D. 1—A.D. 1079, with the addition of an annal 1130]—B, C と同様, Cotton Collection である。それが作られたのが Worcester であると推定されていることから, the Worcester Chronicle と呼ばれる。これは Northumbrian Annals をかなり含んでいる。Northumbrian Annals は D を通して E にも入っている。また, D には, B, C の the Mercian Register も入っている。D の主要な価値は, C 以後の記録を含む点にある。すなわち, この稿本は, 1050 年頃, すでに失われている原本から写しとられ, 1079 年まで続けられた。なお, 1130 年に 1079 年後の記録がつけ加えられた。

6. The Manuscript E (The Laud [Peterborough] Chronicle) Bodleian MS. Laud 636 (A.D. 1—A.D. 1153)—この稿本は, 1121 年から 1154 年までの間にわたって Peterborough で書かれたものである。Bodleian Library にある Laud 大主教の稿本の一部をなすため, the Laud Chronicle とか Bodleian MS. Laud 636 として引用される。また, Peterborough で書かれたということから the Peterborough Chronicle ともいわれる。1023 頃までは C や D などと同じ資料による記録が多く見られるが, 1023 年以降は, 独自の記録を展開している。

7. Manuscript F, British Museum, Cotton MS. Domitian A viii [A.D. 1—A.D. 1058]—これは, Canterbury の Christ Church で Norman Conquest 後に作られた the Canterbury MS. の要約である。現在では Cotton Collection の一部をなす。古代英語とラテン語で書かれていて, ラテン語による年代記に移行してゆく過渡的な段階を示している。

8. Manuscript H (British Museum, Cotton MS. Domitian A ix, on the single leaf folio 9) これは, すでに失われた年代記の断片で, 1113 年および 1114 年の事件を記録している。

9. Manuscript I (British Museum, Cotton MS. Caligula A xv folios 132b-139) Canterbury の Christ Church で書かれた。988 年から 1268 年までの Easter の日を確認させるための表である Easter Table をのせている。なお, ラテン語の記録が付録としてつけられている。

アングロ・サクソン年代記の稿本は, およそ以上のとおりであるが, 本稿においては以下, 単に A, B, C……または MS. A, MS. B, MS. C……として引

用する。(未完)

(注)

- (1) H. M. Chadwick, *The Study of Anglo-Saxon*, p. 20 et seq. ; G. N. Garmonsway, *The Anglo-Saxon Chronicle (Everyman's Library)* p. xv.
- (2) *ibid.*
- (3) Chadwick, *op. cit.* p. 22,
- (4) 拙稿「イギリスにおける公用語の変遷について」*外国文学研究*・第1号・20頁参照。
- (5) Chadwick, *op. cit.* p. 23.
- (6) *ibid.*
- (7) *ibid.*
- (8) この点について、拙稿・前掲・24頁参照。
- (9) Chadwick, *op. cit.*
- (10) たとえば、英語本来の語または語の要素を結合して新語を作る、複合語の形成能力はそのおもなものといえよう。
- (11) この点について、たとえば、上野景福「英語の本来語とラテン系外来語」*言語生活* 第169号、39-40頁参照。
- (12) この点について、たとえば C. L. Wrenn, *The English Language*. p. 13 et seq. 参照。
- (13) Chadwick, *op. cit.* p. 22.
- (14) Garmonsway, *op. cit.* p. xv.
- (15) 以下、歴史と年代記の意味およびその両者の差異について、Charles Plummer, *Two of the Saxon Chronicles*, vol. 2, p. xvii ; Garmonsway, *op. cit.* p. xvii.
- (16) Plummer, *op. cit.* p. xx. なお、この点について、高津春繁・関根正雄「古代文字の解説」5-6頁。
- (17) Plummer, *op. cit.* p. xvii.
- (18) Plummer, *op. cit.* pp. xxi-xxii.
- (19) Garmonsway, *op. cit.* pp. xv-xvi, xix.
- (20) Plummer, *op. cit.* p. xxiii.
- (21) *ibid.* ; Garmonsway, *op. cit.* p. xxxiii.
- (22) なお、これらの稿本について、Plummer vols. 1&2, Garmonsway, *op. cit.* ; *Encyclopaedia Britannica*, vol. 1 ; *Encyclopedia Americana*, vol. 1 ; 研究社「英語学辞典」、それぞれ参照。